

丹羽 健司

1953年奈良県生まれ。有機農業実践目指して信州大学農学部入学。在学中に農業コミュニケーションを訪ねて放浪。少し余分に在学してから数年就農。独立自営の夢破れて、農林省入省・東海農政局勤務。在職中は、農民運動と食の安全運動で農政批判、コメ輸入自由化時には名古屋米で5日間の座り込み決行するなど「アブナイ公務員」に。2000年の東海豪雨被害をきっかけに、森林ボランティア運動をはじめ。01年に足助きこり塾、04年に矢森協を設立、05年からは「森の健康診断」運動、09年からは「木の駅プロジェクト」を全国展開。10年に早期退職し鳥取県智頭町はじめ山村の地域おこしのお手伝いを経て、19年からシェアカフェHYAKKEIの非常勤店番と裏ノ畑管理人に就任。名古屋と岩村の二拠点ライフで、少しでも自分の暮らしを自分でつくりたいと夢想奮闘している。

百経&裏ノ畑 <https://hyakkei-urahata.com/>
Hyakkei (百経) <https://www.facebook.com/sharecafe.hyakkei>



この冊子に掲載されている内容は、平成28年～令和3年の「新スローライフ通信*」として発行された丹羽健司さんの記事をまとめたものです。

*新スローライフ通信とは、NPO 法人都市と農山村交流スローライフセンターが発行していた地域季刊誌です。「自然・森・里・体・心・タマシイをつなげ『生き方・暮らし』を考える」ための話題提供と問題提起を目的にされています。

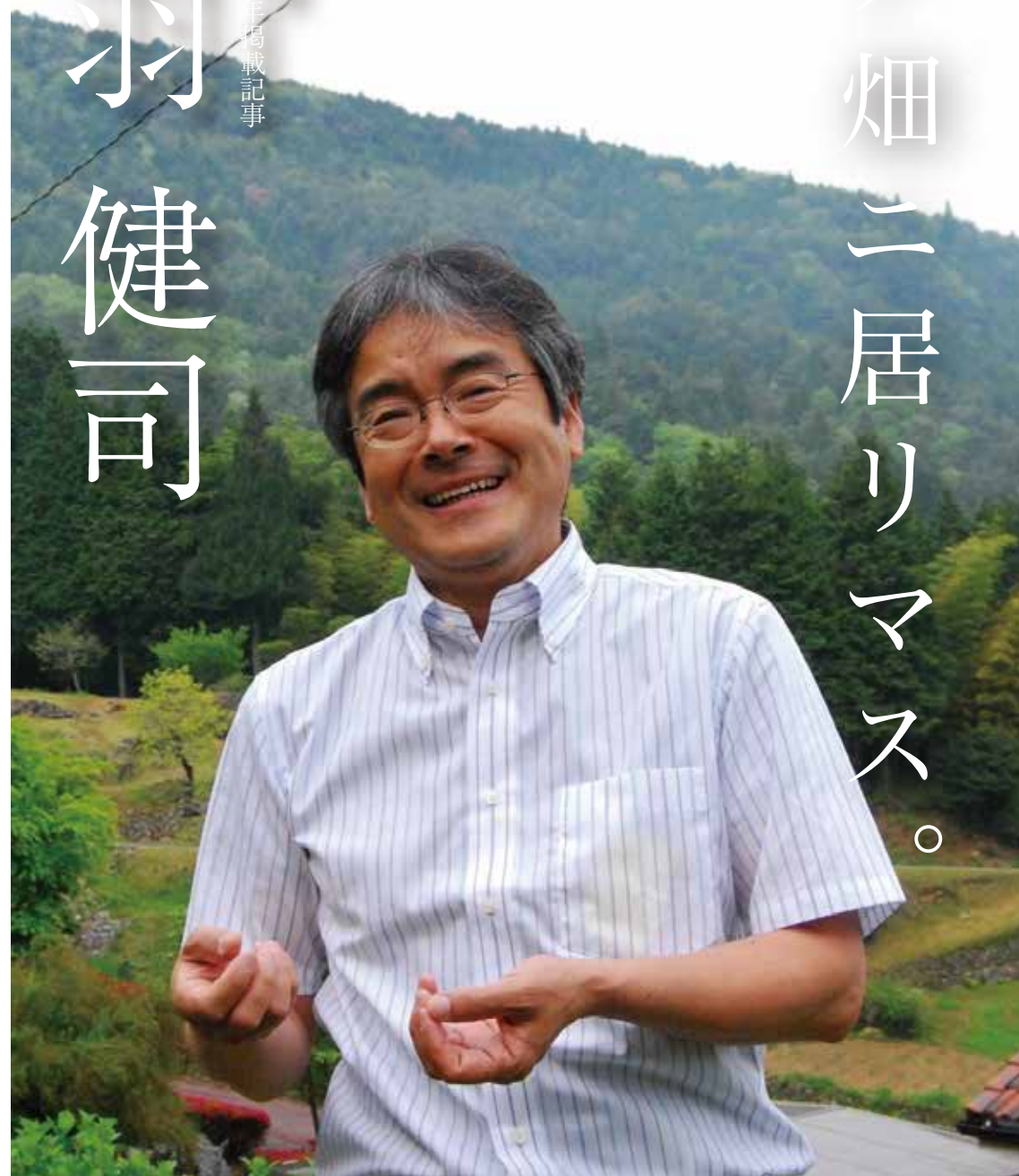
2024年1月1日

発行：一般社団法人おいでん・さんそん

丹羽 健司

新スローライフ通信
平成28年～令和3年掲載記事

裏ノ畑ニ居リマス。



足助モリトピアから

足助モリトピアから ①

いつもならタムシバ（ニオイコブシ）が咲き、湿地にはミズバショウがほころび始める頃なのだが、今年の足助モリトピアの春の訪れは少し遅いようだ。この 50 ヘクタール余りの広大なフィールドはすべてスーさん（鈴木政雄氏）の持山で、そこに私たち「足助きこり塾」は居候している。

2001 年 4 月に豊田市にあった農水省の出先機関に赴任してきた私は早速管内を一回りした。その中の一人がスーさんだった。本人不在だったが超こだわりの木造住宅と薪ストーブ、本棚に並ぶ書籍類を見てピンとくるものがあった。その後も何度か通ったもののすれ違ってばかりだった。やっとアポが取れたのが 8 月 11 日、足助の県有林事務所（当時：現森林課）で落ち合うことになった。

「今ね、愛知県との分収林 10 ヘクタール余りの買戻し契約したところさ」と手に茶封筒を持って現れたスーさん、「お昼にしようか」と二人で参州楼に向かった。

「実はお願いがありまして、森林ボランティアグループを立ち上げようと思うのですが、フィールドの提供と技術指導をお願い・・・」と話し始めたら、「いやーびっくりだな、今さっき買戻した山をちょうどそんなことに使いたいと思っていたところなんだよ。今の林業情勢で



はじたばたせずに、都会の人に山に来てもらい、山の風を都会に吹かせられたら、なんてね」とスーさん。私は半袖の腕から先と背中に鳥肌が立ったのを今でも明確に覚えている。「じゃあ、今から行こう！」。

約 20 分走って着いた山はなだらかな山、うっそうとスギとヒノキが茂っていた。「これからここを強度間伐して雑木も呼び込む。この沢筋はビオトープにする。全体をターシャ・チューダーの庭みたいになりたいんだ。ここを使えばいいよ」と目をキラキラさせたスーさん。実はターシャ・チューダーと聴いても何のことかわからなかったが数年後「あ、このおばあちゃんとこの庭のことなんだ！」と気づくことになる。

「うちも少し山があってチェーンソーもあるのですが、イチから教えてもらえないものでしょうか？」と念押ししたら、「私よりも島崎先生のところできちんと習った方がいい。信州大学を退官されて伊那で森林塾を主宰されているから、そこがいい」と肩透かし。早速伊那に飛んだ。ゴリ押し無理やりで数倍の倍率を超えて 10 月の「K O A 森林塾」集中コースに入った。全国から集まったズブの素人たちに山仕事や森づくりってこんなに楽しくて科学的なものだったのかと感動させていた。何よりもそのコーチたちが 2 ～ 3 年前までは参加者と同じズブの素人だったことと全く畑違いのサラリーマンたちだったことがさらに親近感と希望を感じさせた。これはすごいイケルと思った。それをのちに豊田市に誘致することになるとは当時は想像もしなかったが。

その参加者たちの宴会で「今度足助で森林ボランティアグループを立ち上げたい」と話したら、さっそく名古屋市のヤスさんと四日市のキトワンの 3 名をゲット。後日、そのことを K O A 森林塾の通信誌で目ざとくみつけたキコリンが合流することとなる。一方、小原村樽俣で池野雅道氏の主宰する自給村（現）メンバーの船木夫妻なども加わり、チラシも 30 枚ほど配布した。

「アッシーやってます」それがシゲさんとの出会いの第一声。その募集チラシに反応して私の職場に出かけてきたのだった。「45 歳まで名

古屋で教員やっていて、辞めて足助で自然農とか山仕事やって、朝夕に妻を駅までアッシーで送迎しています。」私は「学校教育現場は大変ですよーモンスターなんかいっぱいいて…」とありきたりの合いの手を入れた。「それが違うんだわ。私の学校は最高の職場で、子どもたちに『自分のやりたいことをやりなさい』と言っているうちに『それじゃあ自分はどうなんだ』と自分に跳ね返ってきちゃって…」「ハァー」

こんなのもありなんだと思った。とにもかくにもそんな出会いから翌 12 月にはシゲさんと仲間たちとで足助きこり塾を創設した。その広大なフィールドに来るなりシゲさんは「21 世紀のディズニーランドだ」と叫んだ。その後たくさんの議論と様々な出会いを経て森林塾（現：とよた森林学校）、矢作川水系森林ボランティア協議会（矢森協）、矢作川森の健康診断、スローライフセンターなどの創設、さらに、おいでんさんそんセンターまでつながっていると思っている。

あれから 16 年、あの時茂っていた森はすっかり明るくなった。初夏にはササユリが咲き誇りモリアオガエルの卵塊が湿地を彩る。24 坪の本格木造「生闘学舎」と、「9 歳の家づくり」で子どもらが自分たちで建てた板葺きや茅葺土壁の小屋が 3 棟、他に 2 棟の小屋とピザ窯、製材所などが散在し、休日には多くの人で賑わっている。

どんどんまだらになっていく記憶をつぎはぎしながら、あのころの「自分のやりたいこと」と思っていたことをほじくり出すことで、今「自分のやりたいこと」とは何なのか、一体自分はどこに行くのかを確かめたいと思い始めている。これから数回にわたって、足助きこり塾のあゆみと矢作川流域の動き、そして仲間たちのキヅキとマナビの 16 年間を振り返ることから、自分はどこに行こうとしているのか、どこに行きたがっているのか、足助モリトピアの風と共に伝えていければと思っている。

足助モリトピアから② ～道をつくる人～

モリトピアでは、アキアカネの乱舞が終わり、ノリウツギの清楚な白い花も散り、台風で落ちたドングリが作業道を埋めている。

スーさんは作業道の草刈りに余念がない。来る日も来る日も草刈りのようだ。この16年間で約50ヘクタールの森に20数kmの道をつけてきた。今年は30kmまで延伸すると作業道整備も一区切りだと頑張っている。作業道づくりは、大橋慶三郎を師と仰ぎ分厚い本を擦りきれるほど読み研修にも出かけたらしい。草刈りをしていると地下足袋の裏から山の神様が道づくりを教えてくれるという。そして今、20数kmの刈払われた道と50ヘクタールの心地よく美しい森が眼前に広がる。

「私、この森、欲しい！」昨年始めた「森女養成講座」で実習に来た森女のモリモリたちが無茶を言う。「この森は道づくりから間伐までゼーンブスーさん一人でやったんだよ」と説明すると、ガッキーが目を丸くして「たった一人で？スーさんて、カッコイイ！」と感嘆。拓いた道は名古屋市役所から豊田市役所までの距離、森の広さは豊田スタジアム12個分に相当する。そういえばこの美しい森への視察が増えた。

近自然森づくりから自然観察まで多様な人々が見学に来るようになった。子どもたちもそうだ。かれこれ13年、毎年7月と10月には安城から子どもたち30人が大型バスで襲来する。午前中は間伐体験、午後は「放僕」で森に放つ。ハイジのブランコ、ターザンロープ、木工、火遊びなどやりたい放題。輪切りや枝を土産にバスに乗り込み爆睡して帰路につく。昨年つくったピザ窯と共に製材機もこの頃大活躍。今



年になってカンナ盤を整備して稼働を始めたのも大きい。丸い原木が四角になりさらにツルツルピカピカになるのだ。足助きこり塾では、来春には学習机ワークショップを企んでいる。モリトピアの木を自分で選び伐倒し搬出して製材する。デザインを描き、墨を打ち、刻み、仕上げにかかる。1年がかりのカリキュラムで、世界にたった一つの学習机を子や孫にプレゼントするという妄想を具現する予定だ。(足助きこり塾では、10月14日と11月26日にイベントを計画中です。詳しくは「検索→足助きこり塾」で)

そんな私たちの妄想と喧騒をよそにスーさんは黙々と草を刈る。そんなスーさんを見てブフィエを思い出した。それは「木を植えた人」(J. ジオノ作)のブフィエだった。

～～～

第一次世界大戦前夜の1913年6月、フランスのプロバンス地方、荒野を旅する「私」は一人の老羊飼いに会う。名はエルゼアール・ブフィエ55才、羊飼いのかたわら荒れ地に毎日100個のドングリを植え続けている。この3年余りですでに10万個を植え2万個が芽を出し結果1万本が残った。かつては他所で農場を営み、一人息子と妻を亡くし、特別にすることもないのでこの荒れた土地を蘇らせようと思いついたことなど話してくれた。翌1914年から第一次世界大戦が始まり、5年後に戦争が終結し、再びかの荒野へ足を運ぶ。ブフィエや彼の植樹活動のことを思い出しながら廃墟を過ぎ、かつての荒野に近づいた「私」は、荒野が何かに覆われているのに気付く。ブフィエは変わらず木を植え続けていた。戦争のことなど全く気にせず木を植え続けていたという。10年前から荒野を覆うように育ったナラの森を歩き自分の背丈より高く成長したナラの木々に、「私」は深い感銘を覚える。1920年以降、「私」は年に1度は必ずブフィエを訪ねるように

なる。ブフィエの計画は常に成功したわけではなく、1年がかりで植えたカエデが全滅するなど悲劇に見舞われることもあったが、ブフィエは挫けることなく一人木を植え続ける。木々の復活はあまりにゆっくりとした変化だったため、周囲の人間はブフィエの活動に気付かず、ときどき訪れる猟師などは森の再生を「自然の悪戯」などと考えていた。



また、森林保護官が「自然に復活した森」に驚き、そこに住むブフィエに「森を破壊しないように」と厳命するなどの珍事まで起こる。しかしそういったことも関係なく、ブフィエは木を植え続ける。その後も第二次世界大戦など様々な危機があったが、ブフィエはそれらも気にせず木を植え続け、いつしか森は広大な面積に成長していた。森が再生したことで、かつての廃墟にも水が戻り、新たな若い移住者が増え、子どもたちの笑い声が響く活気ある町をつくっている。しかし彼らはブフィエの存在も、ひとりの男が森を再生したことも知らない。ブフィエは1947年、バノンの養老院で安らかに息を引き取った。

～～～

そんなブフィエの姿が脳裏に浮かんだのだった。それは2002年の8月31日、きこり塾ができて1年にも満たないころだった。きこり塾のメンバーでもある足助里山ユースホステルのみっちゃん（小川光夫さん）が「木を植えた人を聴く会」を企画した。名古屋在住の俳優の

榊原忠美さんがライフワークでずーっと取り組んでいる朗読劇を招致した。ラストの場面、暗くなった運動場の向こうのプラタナスがライトに照らし出された時、地元の方ときこり塾の仲間たちで埋まった会場から「あぁっ」という声が上がり万雷の拍手。体が震えた。その時、決してブフィエにはなれないけど、なりたいと心から思った。

そんな15年前の記憶がフラッシュバックした。今、絶望と憎悪が地球を覆おうとしている。明日壊れるかもしれない地球でも、私たちは小さな小さなブフィエになり、1本でも間伐し、道を延ばし、一人でも多くの都会の人を森に連れてきたい。そんなことを未だ夢見ている。そしてスーさんは明日も黙々と草を刈る。

（スローライフ通信 2017 より転載）

足助モリトピアから～その3～

モリトピアに 17 年目の春が来た。3 月下旬定例会では、足助きこり塾生総出で昨年鹿に食い荒らされたミズバショウを守るために 60m にわたって間伐材の杭を打ちネットを張った。4 月中旬定例会では生闘学舎で恒例の山菜てんぷらパーティ。リョウブ、コシアブラ、ミツバツツジ、ノビル、ゼンマイ、ヨモギ、イタドリ、ウド、アザミ、タンポポ、ユキノシタ、フキ、サクラ、などまだ少し早い春の恵みを薪ストーブの上でモモコ、タマ、ミケの女性陣がてんぷらにした。揚げる端からミケさんの末っ子ユーマがしいたけの菌打ちで両手のふさがったオジサマ達に「アーン」のシアワセを宅配していた。パリパリ、ホクホク、香り豊かで、甘くほろ苦い春を口元まで配っていた。

ハイジの森は赤紫のミツバツツジが咲き誇っている。直径 1m ほどの大きなモミノキの左右に二人乗りと一人乗りの 2 本のブランコが高さ 7m の横枝からかけてある。来訪者は必ず体験する。誰でも一瞬で 9 歳に戻れる。その山側斜面にあ

るモミノキの大木にはターザンロープが掛けてある。ロープに飛び移り「アアア～～～」と叫ぶことが習わしになっている。心は子どもに戻っても腕力の衰えと体重増とのギャップによる落下事故も多い。

スーさんの雑木林は 300 本余りのヤマザクラが満開で、まんなか池はヒキガエルの卵で溢れていた。2 月には倉さんの発案でイタヤカエ



デのメープルシロップ作りに挑戦したがみごと失敗したところだ。一昨年にはヤマザクラの樹皮を使った秋田県角館の樺工芸支援に挑戦したがこれも挫折した苦い経験がある。スーさんが冬の間に伐ったコナラやアベマキは夏の間に家族で薪割して冬に備える。今年は鳥の巣箱を作って木に懸けようとも言っている。

雑木林の奥は 3.8 ヘクタールのヒノキ林「アマチュアの森」に続く。「自分たちの実践に使い」とスーさんの一言で塾生自主管理の森になった。作業道だけはスーさんがつけてくれた。暗い森だったのが少しずつ少しずつ明るくなった。3 年目頃に 3 坪ほどのトイレ兼物置を塾生で建てたが今は苔が生えている。夏の作業は笹刈り三昧、いつもオヤマさんが修行のように率先垂範。もうすぐ始まる。

これらを取り巻くようにある 50 ヘクタールのヒノキやスギの人工林は、あと数ヘクタールを残してひとつおりの作業道敷設と間伐が終了するようだ。初めて出会った時、「これからここを強度間伐して雑木も呼び込む。この沢筋はビオトープにする。全体をターシャ・テューダーの庭みたいにしたいんだ。ここを使えばいいよ」と目をキラキラさせていたスーさん。あれから 17 年、この森はその「ターシャ・テューダーの庭」みたいな森になったのだろうか。

ターシャ・テューダーは、1915 年生まれのアメリカでもっとも愛されている女性絵本作家でありガーデナー。56 歳の時、広大な荒地をバーモント州の山中に購入して一人暮らしを始めた。家と庭の一带を「コーギー・コテージ」と呼び、電気や水道等、近代設備は最小限に留め暖炉とベッドとロッキングチェア、薪オーブンがあるような質素な室内と古い道具を使う昔ながらの生活を実践した。一日の大半を草花の手入に費やし、小花模様のドレスやエプロンを手作りし山羊の乳を搾り、庭でとれた果実でジャムを作りパイを焼いたりした。92 歳で亡くなるまで絵本を描く傍ら、畑を耕しヤギを飼い糸を紡ぎジャムを煮て暮らす自給自足的なライフスタイルが世界中の共感を呼んだ。

ターシャが 2008 年 6 月 92 歳で亡くなった時、追悼の番組が放映されて初めてターシャの庭や暮らし方を知った。強く共感して本屋で書籍を立ち読みしているときにふとスーさんの言葉がよぎった。この人のことだったんだとやっと合点できた。

「夕方、ポーチのロッキングチェアに座って、カモミールティーでも飲みながら、ツグミが澄んだ声で鳴くのに耳を傾けてごらんなさい。毎日の生活が、もっと楽しくなりますよ。」そして「思うとおりに歩めばいいのよ」とターシャはつぶやいてくれる。私たちもそんな声を聴きたくてこの森に通い続けているような気がする。

スーさん、ここはまぎれもなくターシャの森です。

この春、ターシャの本を 2 冊取り寄せ、実家の裏庭にシラカバを 6 本、バラを 2 本植えた。自分に残された時間と遺す思いを秤にかけてみたくなった。



裏ノ畑ニ居リマス



裏ノ畑ニ居リマス

「この期に及んで何を…」親友があきれた。

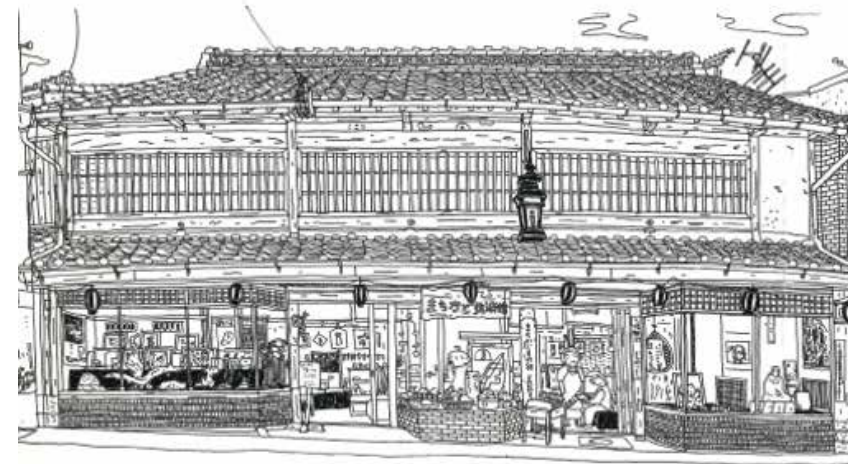
2019 年 7 月 7 日、シェアカフェHYAKKEI をオープンした。私はその非常勤店番&家主ということになった。ひょんなことからずっと空き家にしてあった実家（恵那市岩村町の城下町にある築 120 年余の町家）の店舗部分を改装して、ヨソモノ若者達の発信となりわいの場作りに活用できないかと始めてしまった。なんでこんなことになったのか、これからどうするのか・・・、この期に及んだ顛末と今を記したい。

森の健康診断を始めた時は 50 歳、10 年はやる 10 年しかやらないと宣言した。10 年過ぎたらちょうど 60 歳、役人を円満退職しているはず、そのあとは世のため人のための活動を卒業して名古屋の夜の街の健康診断をやろうぜ！と、シゲさんと二人でうそぶいた。しかし私は 56 歳で早期退職、シゲさんはスローライフどころか相変わらずのイソガシライフだ。なかなか思い通りにはならない。木の駅は始めて 10 年になる、ちょうど潮時と昨秋引退宣言したところだ。

●町家暮らし

ずっと気に掛かっていた。恵那の実家のこと。私は婿に入り実際にそこで暮らしていたのは 3 年ほど、その間に二人の子供が生まれ父が急逝した。30 歳の時に長年続いた洋品店をたたんで母を連れて名古屋に引っ越した。以来 20 年間はほぼ空き家、ここ 15 年間は母が夏の避暑に滞在していた。確か 5 年前だった、知り合った藍染家と藍染め展示即売会や音楽ライブを 1 週間やって賑わった。その時不思議な感覚にとらわれた、「お店が喜んでいる」。

初めてこの町とこの家に来た時、一目で好きになった。私の奈良の実家の近くの今井町に似ていた。しかし、地元の人たちはこんな町な



んかと都会と比べてばかりだった。そんな話を居酒屋でしているとふと、診療所の医師と新聞屋さんと意気投合した。3 人ともヨソモノだった。早速その 3 人で岩村観光研究会なるものを作り勉強会や調査を始めた。しかし我が家のドタバタで私が転出し頓挫した。その思いがあって、夏の間ギャラリーとして開放したり数年間観光協会に活用してもらったりしたものだった。

私が本当に好きだったのは古い町の佇まい（20 年前に重要伝統的建造物群保存地区に指定）よりも町家の構造と暮らし方だった。間口 10 間・奥行き 50 間の敷地に、北から店舗、母屋、中庭、蔵、離れ、裏門、門の南側には東西に天正疎水が流れて 4 畝ほどの畑と南端に 4 軒の借家が続く。庭の真ん中にある井戸水がすべての水をまかない、山からの薪で五右衛門風呂を沸かし、長七輪で魚を焼く。生ごみと灰はドブヤに集め、時々切り返してはぽっとんトイレのオワイと共に畑に熟成させて漉き込む。循環を実感する暮らしがそこにある。

●半分店主

一昨年、65 歳を機にあれこれ考えた。婿である以上いずれはここを終の棲家とすることを想定してきた。しかし妻は田舎の煩わしさと閉

塞感が嫌いらしい。よくある話で、わからないでもない。ちょうど岩村を舞台に「半分、青い」が放映されて通りは大賑わいだった。ふと、「半分ならいいか」と思った。半分店主、半分居住、それならなんとかなるかも、気楽になった。

店をアイターン者や移住希望者などヨソモノや若者のチャレンジショップのように使ってもらいたい、と懇意の役場職員に話をしたら地域商社の宮地さんと大工の秋山さんを紹介された。二人は町づくりの第二世代ともいうべき 40 代の情熱家で空き家再生を通じた地域づくりを模索していた。私は「空き店舗対策はいろいろあるが、もっと店主に寄り添えないものか」と訴えた。それは、私が森や木の問題に関わることになった大きなきっかけは、「ほとんどの山主は素人」ということに気付いたことからだった。「ならば、知識も技術も面白さも学ばばいい」と孤独な素人山主に寄り添い、これまで木の駅なども展開していった。店主も一緒だと思った、素人店主だ。親が老いて病んだ頃定年退職した跡取りがすぐに店舗経営などできるわけがない。自ら営むにしろ貸し出すにしろ手順があるはず、そのことを知らない素人店主は私と同じく孤独だ。それを貸さないからダメとか責めるより、それに寄り添いノウハウ提供する仕組みが必要だと話した。意気投合できた。

まずはお試しに地域物産を扱う N P O にレンタルしたもののミッションが合わずに半年で打ち切った。3 人で真剣に話し合った。店主(私)の願いの「ヨソモノ、若者の発信やなりわいの場作り」なら、日替わり店主方式のシェアカフェが最適となった。

●HYAKKEI

ちょうどその頃新しい仲間が加わった。園原麻友実 32 歳、移住者対策に詳しく移住希望者にも太いパイプとチャンネルとアンテナをもつフリーランス。彼女のセンスと行動力であれよあれよという



間にクラウドファンディングが組まれた。新しい店の名前を考えることになった。「丹羽さん、“立花屋”が入らなくていいですか？」と遠慮がちに訊かれた。「いいよ、全然」「ひゃっけい」「どう書くの?」「百姓の百と経験の経、緯度経度の経」「いいね」「百のなりわいを横糸に縦糸で紡ぐの」「HYAKKEI、いいね!」。その瞬間、“立花屋”からやっと解放された気がした。思わず「ありがとう」と言った。

3 月には澁澤寿一さんの講演会を岩村で開きそのあと工事中のお店で大宴会。「仕事は一つじゃなくていい! “働く” が自由になるカフェを」の彼女のコピーが多く、若者の心をつかんだ。クラウドファンディングは目標を大きく越え 200 万円の寄付と 260 人の仲間を得た(御礼リターンの遅れをお詫びします)。ワークショップで壁を塗ったりテーブル磨いたり、軽トラで厨房機器や什器、ソファをもらいに行ったり、みんなでつくった。そうして 2019 年 7 月 7 日、HYAKKEI 開店。

●とまり木

店舗は店主が入れ替わりながら多彩なイベントが開催されていく。店主も客も多様だ。コアガリの和室も時により開放し小さな子供が遊んでいる。ミニライブもやった。夏には裏門から吹き抜ける風が心地よい。冬になると薪ストーブが威力を発揮した。SNSなどの発信で遠くからの来店も多い。ときおり夜にゼミを開催しそのままどっぷり話し込んでいく。そんな雰囲気を感じ取ってか、ふらりと人生の迷い人も訪ねてくる。園原や丹羽が時間ある限り話を聞き、人によっては薪割りさせたり風呂に入れたり泊まったりイロイロだ。そんな時間を過ごして、それなりの答えを拾っていくのかもしれない。移住を決めたり転職したり人生の節目にとまり木にまわっていき。4月からは機織り娘が移住し機織りしながらの店番も始まりそうだ。

週に一度は地域福祉に貢献したいとの願いに、特別支援学校が応えてくれた。昨秋から、就労支援の一環で喫茶店実習を受け入れた。何度か取り組むうちに、夏休みには是非自分たちで営業にチャレンジしてほしい

と提案したら、真剣に相談していた。うれしかった。

このお店がいろんな人のとまり木になるようにしている。お店が喜んでいる。



●裏ノ畑ニ居リマス

お店に立つことはあるが、私には向いていないと思う。まず、珈琲の味がよくわからないし、行儀作法がよくない、身なりもらしくない。メニューの上げ下げや盛り付けなどがヘタ、などきりがない。私の役割は、HYAKKEI以南、つまり母屋、中庭、蔵、畑などをブラッシュアップすることのようだ。半世紀分の埃を払い愛でて磨いて次代に伝えるのだろう。

この冬、長さ 24mの薪小屋を建て、薪を割り積み込んだ。薪づくりや畑仕事は嫌いじゃない、むしろ無心の単純繰り返し作業は心地よい。こうして木屑まみれになって作る薪が、計算すると 1 時間の成果が 100cc の灯油の熱量に満たないかもしれない。そんなことを考えると虚しくなりそうだが、どっこい心地よい。ばかばかしいようにそんな無駄をしている自分が好きになれるのだ。

昨秋には原木しいたけが豊作、干しシイタケ、干し芋、干し柿が秋を彩った。この前は、杉の丸太を伐って割って串を作ることから、落花生をすり鉢ですりタレを作ってお飯をつぶして握って炭火で焼いて食べるまでのワークショップをして大好評。昨日は我が家で 50 年ぶりにみそを作って蔵に入れた。お店で行儀のいいことはできないけど、自分の暮らしは自分でつくる醍醐味、この頃そんなお手伝いならできそうな気がしてきた。庭づくりはターシャ・テューダー、畑仕事は宮沢賢治でありたいと妄想している。

この期に及んで何を…！

今年は、水曜～金曜は、店か「裏ノ畑ニ居リマス」たぶん。

(スローライフ通信 2020 より転載)

裏ノ畑ニ居リマス 2021 春

「ねえ、やっぱり始めようよ、ね。」「そうだなあ」コーヒーを運ぶと座敷庭を眺めながら 60 半ばの夫婦が話し込んでいる。初夏の休日、その日はちょうどお琴の演奏イベントをやっていて、お店の混雑を避けて二人を縁側に案内した。裏の方に興味を示すお客さんにはいつもの流儀で、店からハシリを抜けて土蔵や五右衛門風呂、井戸、石窯から裏門をくぐって裏ノ畑までの昔ながらの町家を見せてひとくさり説明することになっている。「ずーっとここに住んでらっしゃるの?」と聞かれて、「今は岩村と名古屋の 2 拠点生活です」と定番の答、そしてアレコレ話は続く。そのお二人は名古屋住まいで、揖斐の方に実家があるが今は無人。田舎暮らしは好きだがどっぷり入るのもどうかと迷っているらしい。そんな時ふらっと立ち寄ったのが H Y A K K E I。「畑も庭いじりも家の修繕も少しぐらいできるし、やれそうな気がしてきた」、そして冒頭の会話。



●2 拠点ライフ

コロナ禍で開店もままならない中でも、毎週水曜日朝に一人片道 75 km 約 2 時間車を走らせ、金曜日夜に名古屋に戻る 2 拠点生活が 2 年近く続いている。店では相変わらずコーヒーの味がわからず、裏では畑の草とりや家の修繕に追われているものの、この暮らしは心地よい。

昨年中庭にピザ窯を作った、名前はハウルの石窯。これまでに足助きこり塾で 2 基のピザ窯を作ったという思い上がりで、ロケットストー

ブかまどつきピザ窯を作ることにした。設計図なしの無謀さでイメージよりどんどん横にはみ出し、水平面を取ったりしているうちに凸凹ゴテゴテになってきた。これってどこかで見たような…誰かが「ハウルの動く城」みたいと言ったから「ハウルの石窯」と名付けた。名前負けしないようにこれから土管を付けたりタイル貼ったりしてもっとゴテゴテにすることにした。セミセルフビルドの台所も石膏ボードのままで、仕上げの漆喰の袋と左官コテが納屋でむなしく出番を待っている。どちらも実用可能になったとたんに時間が止まったままだ。庭のバラも花壇も果樹類もなんとなく中途半端。それでも得意げに案内している。まずいコーヒーを飲まされ、凸凹のピザ窯、しょぼいバラたち、いつも雑草に負けそうな農園、弁解と妄想だらけの案内…それにつき合わされたお客さん達こそいい迷惑。しかし妙に納得したり共感したりする。



●半農半カフェのススメ

「自分の暮らしは自分で作る」、なんて言いながらちっとも本格的でない。畑の隣の F おばあちゃんからは、草とりを急かされ畝立てを冷やかされ拳句に 3 倍立派なタマネギやハクサイを見せびらかされる。けど時々「ようやりなさるのお、あんまり頑張りなさんなよ、歳だから」と半分お褒めの言葉をいただく。食べ頃のトウモロコシはハクビシンの餌食に、サツマイモは野ネズミに齧られ、ブルーベリーも昨年からヒヨドリの集中攻撃を浴びている。悔しいので罾をかけネットを張るのだが向こうの方が一枚上手らしい。鳥獣害の情けなさ草取りの大変

さに勝る無心の野良仕事の快感と生育や収穫の喜び、これもお店のように誰かとシェアできないものかと考えた。そしてこの春「半農半カフェ」を呼びかけた。

お店をシェアする若者や中高年に裏ノ畑を区画割りして野菜を作ってもらおうと思った。半農と半カフェセットでも片方だけでもいいから月1回以上来て半年以上続けて



もらうことで募集した。応募した5人で「裏畑倶楽部」を組織し自主運営することにした。畑の管理は毎週滞在する私から畑の様子をLINEで送り共有する。私も一員で管理者でも指導者でもなく百姓見習いの一人に過ぎない。LINEで要請があれば私やシェア仲間が草刈り、水やり、収穫などするけど必ず結い返しする決まり。農具や支柱・マルチ、耕運機などは常備してあるので使ったら洗って元のところに戻しておくルール。まだまだ動き出して間もないが結構面白い。清水の舞台から飛び降りるよういきなり移住＆就業でなく、気楽に通いや短期滞在型のプチ2拠点ライフからスタートすればいい。「ほら見てごらん、いつもあんなに中途半端でいい加減なニワケンでも結構楽しくやっているから大丈夫」そんな声が聞こえてきそう。あの老夫婦もきっとそうだ、「私らならもっとできそう」と確信したに違いない。

これでいいのだ、これならできる、そんな気持ちになってしまう裏ノ畑。

私はまだ、裏ノ畑二居リマス。

(スローライフ通信 2021 より転載)

ミライのフツーに向かって



ちょうど50年前の秋、高校進路三者面談で親父に「過疎地で有機農業をやる」と言ったら、「素人に何ができるか。根こそぎ獣にやられるわい、アホンダラ」と一喝された。それでも農学部に進んだがそこにはそんな学問も実践もなかった。化学農法全盛の時代、それを目指すのは異端でしかなかった。ならばと大学を飛び出し実践者を訪ねて教えを乞い有機農業運動に身を投じた。私の有機農業での独立自営農の夢は就農後あえなく挫折し、都会で食の安全運動などの旗を振る暮らしが続いた。

ところがあれから50年、今では有機農業や自然農ということがフツーになった。そして気が付くと城下町のカフェと裏ノ畑で有機農業や農的暮らしを吹聴している私がいる。狭いながらも畑を耕して、僅かながら野菜や果物をカフェで提供している私がいる。そうだ、かつての私という異端が50年後異郷でのミライでフツーになっていた。

そこには夢見た地平線に広がる農場も列をなす消費者の姿もないがささやかな満たされた裏ノ畑の営みがある。そこでは素人たちが集い、アーデモナイコーデモナイとYouTubeと地元の名人に習い、嬉々としてソバをまき麦を刈り醤油を絞る野菜を作る姿がある。自給自足なんておこがましいが、「自分の暮らしは自分で作る」って超面白い。半分でもいい、1%でもいいからみんな自分の暮らしくらいは自分で作りたいのだ。そんな仲間たちやまだ見ぬ仲間たちのために短期滞在シェアハウス「いわむらBASE」を作った。築百年の小さな町家に1週間でも一か月でも居ればいい。気楽にプチ2拠点生活やナンチャッテ移住を、野良仕事や山仕事それにカフェをやりながら過ごしてみればきっと何か変わる。半農半カフェちょい移住、これもミライのフツーへの種まき。(おいでん・さんそん SHOW2022年11月号より転載)